

多言語社会サハリンにおける日朝露間のコード切り替え —探索的研究—

吉田さち (跡見学園女子大学)・松本和子 (東京大学)

サハリン島はこの百年の間に居住者がほぼ総入れ替えとなるほど人口の流動性の高い地である。20世紀初頭に樺太へ移住した日本人・朝鮮人の中には、今なおロシア政権下の多民族・多言語社会サハリンで暮らしている人々がいる。朝鮮人は2番目に多い民族として人口の5% (24,993人) を占め、少数派となった日本人は朝鮮人コミュニティの一部として多民族・多言語社会サハリンで生活している (松本・高田・奥村・吉田 2023)。

「コード切り替え (code-switching, 以下 CS)」に対する意識は多言語社会と単一言語社会では大きく異なり、前者ではより精巧な CS が観察されることが指摘されている (Holmes & Wilson 2022)。日本語・朝鮮語を含む CS に関する研究は、これまで主に日本や韓国等の単一言語社会における移民コミュニティ (吉田 2013) や国際結婚家庭 (朴銀永 2001) を対象に行われてきた。一方、多言語社会サハリンの CS に関しては、二世へのインタビューデータを基に日朝 CS だけを記述したもの (金美貞 2008) や朝鮮系メディアにおける日朝露の語彙レベルの CS に触れた事例研究 (渡邊 2023) はあるが、談話・文レベルの CS の研究は見当たらない。そこで本発表では、多言語社会サハリンで二世から四世まで辛うじて日本語と朝鮮語を継承している話者より収集した調査資料を基に日常生活における家族間の言語選択や日本語・朝鮮語・ロシア語間の CS の様相を談話・文レベルで考察する。

本発表ではそれぞれロシア語、朝鮮語、日本語の母語話者である調査者4名が2019年ユジノサハリンスク市で収集した家庭内の言語使用に関する質問票の回答および約5時間42分の自然談話を分析する。調査対象者は日本あるいは当時日本の統治下にあった朝鮮半島から樺太へ移住した祖先を持つ二世から四世までの話者16名である。分析の枠組みとして、Gal (1979) の「含意尺度 (implicational scale)」を援用し、調査対象者16名の相手・状況による言語選択のパターンを巨視的に捉えた。そのうえで、Myers-Scotton (1993) の「基盤言語フレームモデル (Matrix Language Frame Model)」の枠組みを参照し、談話・文レベルの基盤言語、切り替えられた要素とその機能を検討した。

全体的な傾向として、二世から四世まで世代が進むにつれて、現地の主流言語であるロシア語への「言語交替 (language shift)」が進むなか、高齢層において日朝露の複雑な CS の様相が見られた。今後は一時帰国者から収集している調査資料も含め、より多角的な視点から3言語間の CS を考察し、さらに在日コリアンやサハリンからの永住帰国者で観察される CS との比較を行うなど、多言語社会・単一言語社会における同一言語の組み合わせの CS においてどのような共通性・相違性が見られるかを明らかにしていきたいと考える。